

# 戸籍の日本史

遠藤正敬

Endo Masataka

## 目次

### 一章 「日本人」としての証明書

「戸籍」を「トセキ」と読む若者  
本籍という謎記載

血統によって決まる「日本人」

書類の上で引き裂かれる国際結婚カップル

戸籍をめぐる謎を歴史からひもとく

### 二章 「古代の制度」がなぜ復活したのか

明治維新で創出された「国民」

近代国家の証しとしての「戸籍」

なぜヤマト王朝は唐の制度に倣ったのか

律令制度の根幹であった「戸籍」

たちどころに形骸化した制度

古代と明治——その戸籍の違いとは

### 三章

## 明治国家が創り出した「家制度」

「家」とは「戸籍」のことなり

国民の家庭をも支配しようとした明治国家

明治になって「家」の意味が変わった

「国体」思想は儒教にあらざる

紙の上の「大家族」

武家社会のルールが庶民へ

### 四章

## 戸主という名の「君主」

戸主権という「権力」

親が子を「勘当する」とは

家督相続と「ご隠居さん」

儒教倫理よりも優先された「家」

## 五章

# 「婿」<sup>むこ</sup>と「妾」<sup>めかけ</sup>の国・日本

世界に類例がない「婿取り」の風習

中国・朝鮮における「姓」の概念

日本の伝統は「夫婦別姓」だった

夫婦同姓を「常識」にした明治民法

かくて日本は儒教道徳を捨てた

日本社会の功利主義を見抜いた『菊と刀』

「阿Q」最大のコンプレックスとは

妾を置くことは「通法」なり

一夫一婦制への長い道のり

『源氏物語』に見る「妻問い」の風習

「入夫婚姻」と「婿養子」の違い

## 【寄り道 その二】

# 人別帳<sup>にんべつちょう</sup>の世界——江戸時代の「戸籍」

天下統一と不可分の人口調査

欠陥の多かった「江戸時代の戸籍」

木枯し紋次郎こからもんじろうはなぜ「無宿」と呼ばれたのか

「札付き」の語源とは

封建体制を揺るがす無宿の存在

世界初の授産所を作った「鬼平」

恐怖の「佐渡送り」

## 第六章

### 創り出された「日本人」

「天皇親政」こそが唯一の回答だった理由

元祖「日本人」の誕生

北海道の「内地化」

叛逆者はんぎやくしやさえ利用した屯田兵政策とんでんへい

戸籍に押し込められるアイヌ

「創氏」政策の起源は明治にあった

看板倒れの「一視同仁」——「旧土人」という蔑称

かくて琉球人は「日本人」になった

破壊された名前の文化

小笠原——青い目の「日本人」たち

## 七章

# 早くも現われた「限界」——徴兵制と国勢調査

最初から躰つまずいた戸籍制度

徴兵逃れに悪用

「法の番人」さえも抜け道を使った

夏目漱石の本籍が北海道にあった理由

「死んだふり」で徴兵逃れ

わずか数年で制度改正の声が

本籍をめぐる政府の敗北宣言

移民たちはかくて「無戸籍者」となった

なぜ国勢調査が生まれたか

## 【寄り道 その二

# 本籍を「皇居」に置く人たち

小津安二郎が描いた「家の崩壊」

「本籍」が出世の決め手

最も多い「本籍」とは

「日本領土」ならばどこでも戸籍を置ける

## 八章

### 戦前の「無戸籍」問題

工業化とともに現われたスラム街

米騒動の衝撃が生んだ「社会政策」

無戸籍解消に乗り出す「方面委員」

苗字すらない一家

戸籍を作れば「人格向上」?

制度から零れ落ちた「まつろわぬ民」サンカ

高橋是清内閣を揺るがした「的ヶ浜事件」

国勢調査で「一網打尽」に

## 九章

### 差別の温床として

昭和戦前期まで残った「族称」記載

前科も載っていた壬申戸籍

かつては公開されていた「ブライバシーの塊」

「正田美智子」の戸籍に群がる人々

後を絶たない不正請求

「罪ある男女の罪なき果実」

二一世紀まで続いた婚外子差別

子どもの続柄にも差別が

「犬神家」三姉妹の父への恨み

## 一〇章

「大日本帝国」の戸籍——朝鮮、台湾、そして満洲

拡大する「日本人」の範囲

近代人権思想の埒外うちがいに置かれた樺太先住民

同じ「日本国籍」でも平等にあらず

「日本国籍」という鎖に縛られた朝鮮人

帝国における「異法地域」の誕生

朝鮮戸籍の誕生

樺太の先住民が「土人」呼ばわりされたわけ

台湾統治の頭痛の種「共婚問題」

戸籍で決まる「民族」の境界

植民地における徴兵と参政権

朝鮮人にとっての「創氏」の意味



はたして「強制」だったのか

戸籍の移動で変換する「民族」

日本が守り続けた「民族の壁」

「傀儡国家」か「独立国家」か

満洲の日本人は「二重国籍」？

「画餅」に終わった国籍法案

戸籍制度がなかった満洲国

日本国籍を維持した開拓民

代打役としての「民籍法」

「国民」も「国籍」もなかった傀儡国家

## 二 一章

# 国破れて「家」あり

戦災に消えた戸籍

「英霊」の死亡届

小野田寛郎——「三度、戸籍上に生を受けた」男

「家」をめぐるGHQと司法省の攻防

「虎の子」を守った詭弁

制度が先か、思想が先か

「民主化」の網をすり抜けた戸籍

## 一二章

### 「日本人」の再編

「第三国人」説の過ち

戸籍を理由に排除された参政権

史上最後の勅令、外国人登録令

戦後も生み出された「外地人」「内地人」の壁

奪われた旧「臣民」の日本国籍

国籍とともに喪失した諸権利

「異法領域」となった占領下沖縄

ゼロから作られた「臨時戸籍」

「琉球人」とは誰か

戸籍再製への執念

蘇った「沖縄県」の文字

「本土復帰運動」の命綱となった戸籍

### 一三章

## 天皇に戸籍はあるか

戸籍なき一族

「臣籍降下」とは何か

謎多き皇統譜

「○○宮」は氏姓にあらず？

一代限りの「御称号」

家父長制の最後の砦、天皇家

天皇に「隠居」は認められるのか？

天皇は「日本国民」か？

### 一四章

## 『サザエさん』に見る戦後の「家」

「入籍」が示す家意識の残存

夫婦同姓と男尊女卑の構図

サザエは「磯野家」の人？

結婚と家の重圧

有名無実だった「釣書」

磯野家の「跡取り」問題

みくたりはん  
三行半とは協議離婚の象徴

「バツイチ」の語源とは

もしもサザエとマスオが離婚したら

タラちゃんが「磯野」姓になるには？

タラちゃんの親権者はサザエか、マスオか？

「サザエ、シングルマザーになる」の巻

「サザエ、婚外子を産む」の巻？

## 終章

戸籍がなくても生きていける

かくして「住民票」は生まれた

住民基本台帳とは何か？

未成年でも「世帯主」になれる

事実婚でも住民票では「夫婦」に

やっとな「住民」と認められた外国人

戸籍がなくても住民票は作れる

民法の矛盾が生み出した無戸籍児

「無戸籍は不幸」という誤解

政府の悲願であった個人番号制度

マイナンバーの登場

「日本人」の精神を管理する戸籍

「血統」というフィクション

戸籍は現実の「家族」を映すものではない

あとがき

写真提供／朝日新聞フォトアーカイブ

毎日フォトバンク

共同通信イメージリンク

# 一章「日本人」としての証明書

## 「戸籍」を「トセキ」と読む若者

およそ日本人で「戸籍<sup>こせき</sup>」という言葉をまったく知らない人はいないだろう。

だが、戸籍とは一体、何のためにあるのか、どんな内容なのかを正確に知っている人は少ない。また「知っている」つもりでもその「理解」が「誤解」であることが多々あるのが現実である。

たとえば、戸籍とよく混同されるものに住民票があるが、この二つの違いは何かと問われて正しく答えられる人がどれだけいるだろうか。

「さすらいの非常勤講師」としてさまざまな大学で教壇に立つ筆者であるが、授業中に折をみて学生に「自分の戸籍を見たことがある人は？」と尋ねるようにしている。

すると一クラスで数人くらいの割合で自信なさげに手を挙げる学生がいる。そのたいていが海外旅行をするためにパスポートの交付を申請する時に戸籍の写し（戸籍謄本<sup>とうほん</sup>）を見たという。今や海外旅行や留学などのためにパスポートを作った学生はもつと多いはずだが、そこで手を挙げる人が少ないのは、自分が提出したのは戸籍なのか住民票なのかを意識していなかったからだろう。

つまりは、大半の日本人は自分の戸籍と「対面する」機会といえは、せいぜいパスポートの申請など一生のうちに数回しかないまま生きているということである。

パスポート作成以外に、日本人にとって戸籍を意識するのは結婚の時であろう。

もし、大学の授業で「結婚するとは、どういうことか、述べなさい」という簡易テストを出したとする。そうすると、おそらく「婚姻届」を役所に出せば、二人はめでたく同じ戸籍に「夫・妻」として名前が載る、これが「結婚する」ということである、という解答が大概であろう。しかし、この解答ではせいぜい及第点である。

戸籍に「夫婦」として記載されてはじめて「婚姻」となる、という点に間違いはない。だが、それでは婚姻届を出していない、いわゆる事実婚カップルは「結婚」とはいえないのか？

ことに、性自認における多様性が常識になった今日の世界にあつて、今なお日本では同性同士の婚姻は法制度的には公認されていない。

これはひとえに、カップルが法的に「結婚」となる上で戸籍がいわば「足かせ」になっているということである。そこを問題として注視しなければ、戸籍の持つ性格は浮かんでこない。とはいうものの、そこまで戸籍に関して学生に一考を要するもの、ないものねだりというべきかもしれない。

「法律のプロ」とされる弁護士や司法書士でも、戸籍という制度の本質やその起源について熟知している人は稀ではないか。

法務省の官僚でさえも、その辺は怪しい。もちろん、彼らはどの局面で戸籍の提示が必要に



なり、どの局面で戸籍が作成されるかといった技術的知識はあっても、戸籍の持つ「本質」というものまでは深い理解を持っていないと思われる。

とはいえ、司法試験や公務員試験で「戸籍とは何か」とか「住民票の定義を示せ」という直球の出題があったという話は寡聞<sup>かぶん</sup>にして知らないのです、それも無理のない話かもしれない。

ましてや、そうした法律の専門家ではない一般の読者にして「戸籍が何であるか」という知識を持つ人が皆無であるとしても少しも不思議ではない。

何しろ、インターネットでは、「戸籍」のことをずっと『トセキ』と読むものと思っていた、という若者（おそらく）の書き込みもみられる始末である。

それも、「コセキ」がもはや悲しいかな、「戸籍」と書かれた文字でしか茫漠と認識されていない単語になりつつある一つの証<sup>あかし</sup>しともいえよう。

## 本籍という謎記載

先ほど述べた大学での授業風景に戻ってみよう。

「パスポートを申請する時に戸籍を見た」という学生に対して、「そこに何が書いてあったか覚えている？」と聞いてみると、「ええと現住所があったよう……」という頼りない答えが返ってくる。

そこで筆者はすかさず「戸籍には現住所なんか載ってないよ。それは住民票じゃないの！」とツツコミを入れてオチとなるのがたいていである。

戸籍には現住所は書いていないという話を聞いて意外に思う読者も多いかもしれない。

そう、戸籍には、その人が今、どこに住んでいるかという現住所を書く欄は存在しない。

もっとも現行の戸籍法では、戸籍に添付される「附票」<sup>ふひょう</sup>にその人の住所変更が逐一書き込まれるようにはなっている。だが、「附票」という名が示すように、現住所は戸籍からすれば肝心な情報ではないのである。

では、一体、戸籍には何が書いてあるのか？

出生地、生年月日、親の名前……このほか、思いつくとすれば「本籍」であろう。

さよう、それは間違いではないが、では、その本籍とは一体何のことか？ そう問われたら、正しい答えを返せる人がどれだけいるだろうか。

後述するが、戸籍制度において「本籍」とは、「その人の戸籍が管理されている場所」という意味以上のものはない。はつきりいえば、本籍とは戸籍における「添え物」である。だからこそ、本籍の場所は好き勝手に決めてよく（ただし、日本国内に限る）、別に自分の出生地や先祖の出身地などである必要はないのである。

たとえば婚姻届を出す際に、夫婦の本籍をどうするかと問われる。今日では、現住所に本籍

を置くのが一般的のようだが、現住所が北海道でありながら「新婚旅行の思い出の場所だから」と沖縄県の離島・宮古島みやこじまに本籍を置こうが、初デートの場所である千葉県浦安の東京ディズニーランドに置こうが何の問題もない。

こうみてくると、まさしく本籍とは「お飾り」に過ぎないことがわかる。実際、読者も日常において、何らかの書類に本籍を記載する場面はほぼ皆無であることに気付くであろう。

では一体、なぜそんな無用に思える本籍が戸籍の先頭に麗々しく書かれているのか？ これなども「戸籍の歴史をめぐる謎」の一つといえるだろう。

## 血統によって決まる「日本人」

では一体、戸籍とは、何のためにあるのか。何を記録するための公文書なのか。

その答えは幾通りもあるが、ここでは最も重要な答えを述べよう。

戸籍の本質とは「日本人であることの証明」である。言い換えるならば、戸籍を持っている人はすべて「日本国籍」ということであり、裏を返せば「戸籍のない人は日本人ではない」とみなされるのである。

それを知れば、なぜパスポートを作る時に戸籍謄本が必要となるのかも納得できるはずである。パスポートは海外渡航において行先の当局に対して「私は日本国籍です」と示すための万

国共通の公文書であるから、その交付にあたっては何よりも重要な証拠資料とされるのが戸籍というわけである。

では、戸籍に「日本人」として載るのは誰なのか？ 禅問答のようになるが、端的に言えば日本国家によつて「日本国籍」として公認される者とは誰か？ ということである。

いうまでもなく、誰にその国の国籍を与えるかは、国によつて異なる。

たとえば米国では、出生地主義といつて、親の国籍に関係なく、その国で生まれたら自動的にその国の国籍を与えられる。

現在のトランプ政権が移民の排除に躍起になっている理由の一つもその国籍の問題がある。米国の国籍法は出生地主義を原則とするので、たとえ不法に入国した移民であっても、その移民が米国内で出産すれば、その子は「アメリカ人」として、その人権は合衆国憲法によつて保護されることになる。なればこそ、「白人至上主義」を掲げるトランプとしては「これ以上、肌の色も母国語も異なる『アメリカ人』が増えたら困る」というので、移民は一人として入れないと息巻くわけである。

かたや、日本の国籍政策では、明治時代以来、一貫して血統主義を採っている。

すなわち、日本で生まれたとしても親のいずれか一方が日本人でなければ、その子は日本人とはならない。逆に、海外で生まれたとしてもその親が日本人であるならば、ブラジルやペル

1の日系移民のようにたとえ日本語が話せず、日本に一度も行ったことがなくても日本国籍となる。

そしてその人が実際に日本国籍であることの証明が戸籍なのである。その誕生に際して、親が出生届を出し、親の戸籍に「子」として名前が記されることによって「日本人」として公認される。

ここで、読者の中には「無戸籍の日本人」という問題について思い浮かべた方も少なくないだろう。

「無戸籍の日本人」とは何を意味するのか？ 詳細は後述するが、まずここで述べておきたいのは、日本人の親から生まれ、事実上「日本人」であるにもかかわらず、諸々の事情によって出生届を出されなかったために戸籍がない、つまり、その人が「日本人」であることの証明がない人のことである。

この問題のゆがみは、「親が日本人であるという事実」よりも、「戸籍がないという事実」が公的に重視されてしまうという点にあることをまずは述べておこう。

## 書類の上で引き裂かれる国際結婚カップル

ここまでの話を要すれば、「戸籍には『日本人』しか載せない」ということになる。それは、

いふなれば戸籍は「排外主義」を原則としていることを示しているわけである。

この原則がいかに徹底しているかを知るには、国際結婚した夫婦の戸籍を見れば明瞭である。日本人同士（ただし異性同士に限る）の結婚ならば、先ほども述べたように結婚に伴って、それまで入っていた戸籍から外れ、新たに作られた戸籍に二人の名前が「夫婦」として載る。

ところが、夫婦の一方が外国人であった場合、そうはならない。もちろん、国際結婚の場合も婚姻届を役所に出すことにより、二人は「婚姻した」という事実は登録される。しかし、それはあくまでも「形式的」な手続きに過ぎない。

つまり、外国人と日本人が結婚しても二人が「夫婦」として名を連ねる戸籍は作られることはない。日本人の配偶者について新たな戸籍が作られるのみである。当人たちからすれば、これでは「結婚した」という達成感はないかもしれない。

ただし、日本人の戸籍には「外国人と結婚した」という法的な事実は記載される。

すなわち、戸籍の「身分事項」というところに「婚姻」という記載欄が設けられ、そこに「○年×月△日に○○と婚姻した」という記載とともに、相手の生年月日や国籍などの情報が記載される。しかし、これもまた日本人配偶者の戸籍の「備考欄」にその名が付記されるようなものに過ぎない。

このあたりの「一線の引き方」に、戸籍という制度の冷たさを感じる人がいたとしても不思議

議はない。

しかし、戸籍は「日本人の証明」という性質を貫徹しようとするものである以上、外国人との婚姻についてはここまでの記載が「百歩譲って」の配慮なのである。

### 戸籍をめぐる謎を歴史からひもとく

このような戸籍という制度が長きにわたって生き続けている日本。

日本人でありながら、その「日本人」の証明である戸籍について大して知らない日本人が数多く生きているこの国。

果たして、これまでの記述を読んできた人の脳裏にはきつと次のような疑問が矢継ぎ早に浮かぶはずである。

そもそも、一体、戸籍とは何なのだろう？

なぜ「日本人」である証明書が必要なのか？

戸籍はいつからある制度なのか？

戸籍を持つことは「日本人」としての「義務」なのか？

日本国家の「象徴」とされる天皇には戸籍はあるのか？

この「多様性」の時代に、戸籍という制度を維持する理由はあるのか？

おっと、それらの疑問への答えは、ここからの正念場となる。

本書は、「戸籍」という、多くの「日本人」にとって「得<sup>え</sup>体<sup>たい</sup>の知れないもの」でありながら、「日本人」なるものを形作ってきた「制度」にして「秩序」について、その実体を歴史の観点から掘り起こしていこうとするものである。以下、とくにご覧いただきたい。



# 戸籍の日本史

遠藤正敬

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,199円（10%税込）

発売日：2025年10月7日

ISBN：978-4-7976-8162-8

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)